

## 【病害虫発生特殊報】

平成2年5月16日  
東京都病害虫防除所

## 病害虫名: カキクダアザミウマ

## 1. 発生確認の経過

神奈川県において昭和63年9月に続き、平成元年4月に本種の発生が確認されたため注意していたところ、5月8日に都下南多摩普及員吉野氏より発生の連絡を受けた。翌9日、町田市能ヶ谷の3地点の柿樹新葉から本種の成虫と卵の寄生を認め、東京都での発生が初めて確認された。さらに同10日立川市農試内においても、ごく低密度ながら発生を確認した。

## 2. 発生生態

越冬は成虫で、通常年1回発生する。カキや付近のマツ、スギ、クヌギなどの粗皮下にもぐり、集団で越冬する。4月下旬頃から越冬場所を脱出し、カキの新芽へ移り若葉に寄生する。寄生葉は巻葉となる。卵は巻葉内の表面に1粒ずつ離して産みつけられる。幼虫はふ化後も被害葉内にあつて汁液を吸収するが、一部のものは被害葉を脱出し果実に寄生して加害する。老熟すると加害場所で蛹となる。第1世代成虫は5月下旬～6月上旬頃から羽化し、6月下旬頃から加害場所を離れてカキやマツなどの粗皮間隙へ潜入し、翌年4月上旬頃まで越夏、越冬する。

## 3. 形態

成虫は体長が2.8～3.0mm、全体が黒色でアザミウマ類においては大型に属する。卵は長さ0.4mm、両端の丸い円筒型をし、半透明でわずかに黄色味おびた乳白色を呈する。幼虫は老熟すると体長が1.8mm前後、胴部は淡橙黄色、頭部、触角、脚は黒色で2齢を経過する。蛹は半透明で全体が乳橙色をおび、歩行が可能である。蛹は脱皮し、3齢を経た後に新成虫となる。

## 4. 被害状況

本種はカキの葉と新成虫による果実を加害する。

被害葉は表を内側にして葉縁から主脈にむかってたてに巻く。被害の軽い場合は葉縁の一部や葉の片側が巻くが、激しい場合は両側が巻いて棒状になる。被害部には褐色の小斑点が散在し、葉脈間が肥厚して火ぶくれ状となる。巻葉はしだいに褐変して落葉する。

果実に被害は、落花後間もない幼果に0.5mmくらいの褐色斑点が認められる。成熟果では主に果実の側面に、赤褐色ないし黒褐色の斑点あるいはそれらのゆ合した斑紋が残る。このようなカキクダアザミウマによる果実の被害症状は、チャノキイロアザミウマやその他によるものに比較すると個々の斑点が大きくて容易に区別ができる。

## 5. 防除方法

成虫はカキの枝幹の粗皮のすきまで越冬するので、冬季に粗皮を削り集めて焼却するか、土中に埋め、園内の密度を下げる。

越冬後成虫が新梢に飛来し、産卵の始まるまで（4月下旬～5月上旬）が重要な薬剤の防除時期である。さらに、開花前に薬剤散布をし、果実の被害を防除する。

### 防 除 薬 剤

薬剤名	希釈倍数	適正使用基準	
		収穫前日数	使用回数
トクチオン乳剤	1,000	60日前まで	5回以内
オフナック水和剤	1,000	45	3
オルトラン水和剤	1,000～1,500	展葉期～幼果期	2
*パダン水溶剤	1,000	45	4
*パーマチオン水和剤	1,000	45	3

\*印を付した薬剤は蚕毒が強いので、養蚕地帯では使用しない。